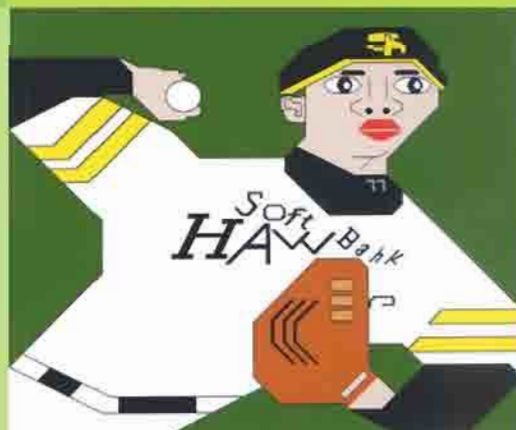


# 誠愛 TIMES

広報誌  
平成21年 10号  
医療法人社団 三光会  
誠愛リハビリテーション病院



- ◆ 医局からこんにちは  
医師紹介（インタビュー）
- ◆ ボバースアプローチ  
上級講習会
- ◆ Roy Adaptation  
Association から  
Award paper を受賞しました！
- ◆ 地域ふれあい演芸会
- ◆ 表紙イラスト作者紹介



## 医局からこんにちは ―― 医師紹介

今回は、外来医長の石松義弘医師へのインタビューをお届けします。石松医師は国際医療援助に携わった経歴を持っており、その体験にまつわる興味深い話を聞くことができました。

(聞き手：渡邊義将)

\*\*\*\*\*

―― いわゆる第3世界の国々への国際医療援助のことはニュースやドキュメンタリー番組などで時々耳にしますが、石松先生はどのような国への援助事業に参加したのですか？

(石松)「長期の仕事だと、パキスタンとカンボジア、それからドミニカ共和国に行きました。あと、それ以外にも短期間ですが、ザイールとカザフ共和国でも仕事をしました。」

―― いろんな国に行かれてますね。長期というと、どのくらいの期間ですか？

「一番初めに行ったのがパキスタンで、途中中断がありましたが計2年間滞在しました。最後に行ったのがドミニカで、これも2年間。カンボジアのが一番長くて、6年半いました。」

―― 6年半！

「最初は2年くらいのつもりでしたけれど、諸事情により延びちゃって。」

―― その間、日本に帰国することはなかったんですか？

「いや、年に1回、1ヶ月間くらい戻っていました。カンボジアのときは、あるNGOのプロジェクトに参加していたんですが、毎年3月に過去1年間の反省会や次年度の計画・予算の立案、年次総会などを行い、計画の申請書を作って資金集めに回ります。NGOは一般の賛助会員から会費を集めたり、大口の寄付をもらったりしてますけど、それだけじゃ足りないんで公的補助制度（郵貯、外務省、企業の基金など）のお金を獲得しなくちゃいけないんですよ。」

―― NGOへはどうやって参加したのですか？

「自分で情報収集はしましたが、学生時代からの交友関係など人と人のコネクションを頼りに紹介されたりもしました。ドミニカに行ったときはJICA（国際協力事業団）のプロジェクトだったんですが、JICAの事業は政府間の取り決めで行われていて、大学と協力することが多いんですね。私の場合は母校の教授との個人的なつながりで参加を呼びかけられました。」

―― 海外へ派遣されるのに何らかの資格や事前のトレーニングが必要ですか？



石松先生

「NGOもJICAも一般公募してますけど、経験・言葉・知識・専門性など、おのこのプロジェクトに合った人材を選ぶために、厳しいふるいかけられます。公の大きなお金を使い、困難や危険を伴う仕事でもあるので、個人的関係を利用して有能な人材を紹介してもらうことも多いようです。私自身は、海外へ行くために大学卒業後はできるだけいろいろな診療科を経験したくて、大学の医局には所属せず、すぐ市中病院へ出て外科、内科、小児科などをまわりました。当時はまだ現在の研修医のようにスーパーローテートの制度はありませんでしたけど。」

―― 経験重視ということだと、最初に行ったところでは苦労したのではないですか？

「たしかに最初パキスタンに行ったときなどは、参加させてもらっているといった感じで何の役にも立てませんでしたので、現地で情報を仕入れてイギリスに渡り、リバプールの熱帯医学校で勉強しました。」

(次ページに続く)



この学校は熱帯地方などでの医療支援のために現地の医療環境に即した知識・技能の習得することを目的とした教育機関で、その筋の方々には有名なところですよ。日本にはこういった教育機関はほとんどないですね。パキスタンから帰国した後は、疫学に興味を持ち、大学時代の先輩が在籍していた岡山大学の公衆衛生学教室にしばらく居候させてもらいました。その後、東京の賛育会病院に頼み込んで産婦人科の臨床も経験させていただきました。これまでの研修で抜けていた分野を押さえておきたいという単純な理由からでしたけど、結果的にカンボジアでの母子医療保険に関する仕事にその経験が生きることとなりました。」

—— 海外経験だけでなく、医学部卒後の経歴もかなりユニークですね。大学を卒業する時点ですでに海外での医療支援活動を意識していたようですが、何かきっかけがあったんですか？出身の大学にそういう人が多かったとか…

「いや、母校でも自分のようなのは特殊な部類だと思います。学生時代は山登りが好きで、ネパールとかに行くことが多かったんですよ。」

—— もしかしてチョモランマに登ったとか？！

「いや、麓をうろうろしてました(笑)。キリマンジャロは登頂しましたが、で、そうして訪れたアジアやアフリカの貧しい国々の実情を目の当たりにして、これは何とかしたいなと。」

—— 仕事内容はどのような感じでしたか？

「基本的に、現地の環境に即した医療環境の整備を行い、現地のスタッフを育成し、彼らが主体的に地域医療を担っていけるまで手伝って、最終的に彼ら自身の手に乗せる、ということを行います。カンボジアでは、プロジェクトの立案・計画、人材・資金集め、現地での立ち上げ、現地スタッフへの受け渡しまですべてに関わることができました。ある地方の10万人程度の人口の地域に、ヘルスセンターを中核とした母子保健システムを立ち上げて人材育成を行うというプロジェクトでしたけど、そのプロジェクト・リーダーとして、1992年から派遣されました。」

—— プロジェクト・リーダーですか！すごいですね。現地の住居や事務所などの準備は受け入れ側の仕事ですか？

「いや、単身で現地に赴き、保健省など政府関係者と打ち合わせた後は、すべて自分で必要な準備を行いました。首都プノンペンで安全な場所に事務所兼住居を見つけ、バイクや車を購入し、現地スタッフを雇い、その後徐々に日本人スタッフも増えていき本格的に仕事を進めていくこととなります。実際に事業を行う地域の病院の敷地内に現地事務所を建てるために、現地の大工さんと直に交渉もしました。」

—— ちょっと聞いただけでも相当に大変そうですが、計画通りにプロジェクトが進まないというプレッシャーとか感じませんでしたか？

「そもそも日本側だけで計画を立ててもダメで、現地の人たちが主体的に参加できるように、彼らに計画をたててもらうように持っていくことが大切なんですよ。だから、タイム・スケジュールはできるだけラフにしてあってその面でのプレッシャーはそれほど強くありませんでした。このカンボジアのヘルスセンターは現在も稼働していて、グーグルで見ると建物が増えているようです。」

—— 先生方が植えた種がうまく根付いているということですね。すばらしい限りだと思います。

「このプロジェクトのカンボジア側の責任者はポル・ポト時代を生き抜いたお医者さんで、医学的知識が高度というわけではなかったけれど、大変な人格者でした。自分たちで自分たちの地域住民の健康を守りたいという強い意志をもってことにあたっておられて、カウンター・パートのスタッフが主体的に動くという好例ではないかと思えます。」



渡邊先生



—— これまでの先生の経歴は、日本国内よりも海外のほうが長いわけですね。そんな先生にとって、第3世界の国々から見た日本の医療環境とはどのようなものなのでしょうか？

「例えばやっと調達してきた医療器具を使うためにまず煮沸消毒器の燃料を手に入れなければならないといった具合に、貧しい国々では最低限の仕事環境から自分の手で作る必要に迫られます。それに比べ、ほとんどお膳立てをしてもらった状況で働くことができるという点で、日本の医者は恵まれていると思います。逆に、自分で道を切り開いていくということに関しては強くないのかもしれないかもしれません。ただし専門性や技術は貧しい国々とは比べようもないくらいに高いわけで、仕事環境も含めて、求められるべき医療水準は国によりおのずと異なってくるものであると思います。」

—— 海外派遣の経験が、先生自身の医療者としての態度にどのような影響を与えていると考えますか？

「うーん…質問が難しすぎて困りますが…、医師や患者を取り巻く環境は各国でかなり異なります。でも、医師と患者の間の関係は、つまるところ人と人との係わり合いなんだと思います。だから、基本的にどこにいても患者さんを診るときの態度は変わらないような気がします。」

\*\*\*\*\*

一つ一つの質問に対し誠実に丁寧に答える石松医師の態度からその人柄がにじみ出ているように感じられ、大変楽しいインタビューとなりました。彼の体験談をまとめると、それこそ何冊かの本になってしまうのではないのでしょうか。今回のインタビューではそのほんの一部だけを語っていただきましたが、もっと詳しくお知りになりたい方は、執筆を依頼されてはいかがでしょうか？

## ボバースアプローチ上級講習会

平成20年12月2日(火曜)～12月6日(土曜)の5日間の日程で、ボバースアプローチ・シニアインストラクターであるゲリンデ・ハッセ女史(ドイツ)をコースリーダーとしてお招きし、「ボバースアプローチ上級講習会」が当院で開催されました。講習会のマネジメント及びコースアシスタントとして、順天堂大学付属順天堂練馬病院の石田利江先生も参加されました。

この講習会は、当院でも毎年開催されている3週間のボバース基礎講習会を受講した理学療法士(PT)・作業療法士(OT)・言語聴覚士(ST)を対象に、各々の評価技術と治療技術を更に向上することも目的とした講習会で、当院からの4名を含め、北は北海道、南は沖縄より24名が参加して開催されました。

今回の講習会のテーマは、「The analysis of the deficits and the potential for recovery of individual patient for goal setting and treatment approach」＝治療目標設定のための個々の患者の回復への可能性と障害の分析と治療アプローチ、でテーマに沿った講義や治療練習、患者様に協力を頂き実際の治療場面での指導もありました。

ゲリンデ先生は、脳には可塑性(残存した神経細胞が可塑的に変化して機能を補う)があることが証明されているが、我々セラピストが患者さんへ送る運動感覚を患者さん自らが感じて学んでいくことの大事さを強調して述べられており、実際の治療でも患者さんに自分の体を言葉や運動を通じて理解していくセラピーを見せて頂きました。それはとれも衝撃的な治療展開のスタイルで、セラピストが一方的に治療していくのではなく、セラピストが行っている内容の意味を患者さんにも理解していただき、訓練のなかに患者さんが心身ともに参加できるように治療を展開される姿をみて、これはとても大事なことだし、患者さんが機能を回復していくためにも必要なことだと実感できました。この貴重な体験を必ず日々の訓練に取り入れ、患者さんの機能回復と社会参加を援助できるセラピストに成長していきたい!と意気込んだ5日間でした。

最後に、この講習会に快くご協力頂きました患者さん、またご家族の皆様、本当に有難うございました。

ボバース事務局 坂口重樹(理学療法課)



ゲリンデ先生(写真中央)と参加者



## Roy Adaptation Association から Award paper を受賞しました！

9月にマサチューセッツ・ジェネラル・ホスピタルで開催された受賞式に参加してきました！

このたび米国に本部を置く Roy Adaptation Association から賞を頂きました。受賞した論文のタイトルは、“日本のリハビリテーション病院におけるロイ適応看護モデルの電子カルテへの適用”です。Roy Adaptation Association は、ボストンカレッジの教授で看護の理論家であるシスター・カリスタ・ロイ先生を中心に設立され、ロイ適応看護モデルの検証研究を通してモデルと実践の発展を目的とし活動している協会です。看護理論とは、私たち看護師が看護を実践するための基礎となるものです。

当院の看護部は平成10年からロイ適応看護モデルを基礎とした看護を実践してきました。平成17年の10月に電子カルテシステムが導入されましたがこのシステムの看護記録は、ロイ適応看護モデルが基盤となっています。

本研究は当院でロイ適応看護モデルを実践し電子カルテ記録まで発展させてきたことを背景に、現段階での看護介入の評価について 日高艶子准教授（聖マリア学院大学）と長年研究してきた結果を報告したものです。

本研究の1部は、2009年10月初旬に米国で出版された“The Roy Adaptation Model -Third Edition-”のChapter21に紹介されています。長年にわたり当院の看護師が患者を詳細に観察し看護を展開してきたことが、今回の受賞につながりました。今後も、ロイ適応看護モデルを臨床で展開し、質の高い看護を提供していきたいと思えます。

誠愛リハビリテーション病院 副院長、看護部 金山萬紀子



右から2人目 金山副院長



MGHの正面玄関

# The Roy Ac Model



## Sister Callis

## 表紙イラスト作者紹介

### <作者より>

週に2回リハビリに通っている村田啓彰です。  
今回、初めて誠愛タイムズに応募しました。  
今まで書いてきた絵から自分が気に入った絵を選びました。  
タイトルは「日本庭園を彼女といっしょに満喫」



村田 啓彰さん

### <リハビリ担当より>

村田啓彰さんはリハビリ通院中です。現在、週に2度誠愛リハビリテーション病院に通っています。今年の夏ごろより、趣味のデザインを仕事してみたい、との言葉が開かれていました。村田さんはパソコン操作を得意としているため、パソコンによるデザイン画製作を提案し、実施していただきました。自宅にて休憩を挟みながら3～4時間パソコンに向かうこともしばしばで、一か月間で1枚のペースでデザイン画を作っています。作ったデザイン画は葉書にして親戚や友人にプレゼントしたりしています。今後はデザイン画によるカレンダー製作や、オリジナルキャラクターをデザインしていきたいと予定しているようです。今後の活躍ご期待ください！

作業療法士 新本憲治

## 第19回地域ふれあい演芸会

平成20年12月13日（土）、第19回地域ふれあい演芸会が今年も開催されました！  
今年は「なごみ」をテーマとし、かわいい園児たちのキャンドルサービスをはじめ、美しい歌声をコーラスとソロでお聴かせいただいたフォーリーブスの方々、また、職員それぞれの部署からの笑いの止まらない出し物と盛りだくさんの内容でした。また、飛び入りで入院患者様より「博多にわか」をご披露していただく場面もあり、観客の皆様、スタッフ共々楽しい時間を共有することができました。



### 患者さんの権利宣言

当院は次に挙げる患者さんの権利を尊重した医療を行ないます

- ・安全で良心的な一貫した医療を受ける権利
- ・個人の尊重とプライバシーを守る権利
- ・自らのことを知り、説明を受ける権利 また苦痛を申し立てる権利
- ・医療機関或いは医療行為を選択・決定し、或いは拒否する権利
- ・患者さんの日常生活に配慮した医療を受ける権利

医療法人社団三光会  
誠愛リハビリテーション病院